論　文

子どもが「世界の謎」と出会うとき
―『ペンギン・ハイウェイ』および『わたしを離さないで』に見る世界の謎―

千　秋　佳　世

Ⅰ．はじめに

子どもとは何だろう。そして、子どもが大人になるとは、どういうことだろう。思うに、それはこうだ。子どもは、まだこの世の中のことをよく知らない。それがどんな原理で成り立っているのか、まだよくわかっていない。では、大人は分かっているのだろうか。ある程度はそうだ。大人はわかっている。しかし、全面的にわかっているわけではない。むしろ、大人とは、世の中になれてしまって、わかっていないということを忘れてしまっているひとたちのことだ、とも言えるだろう。

永井均（1996）〈子ども〉のための哲学

哲学者の永井均は、上記のように「子ども」と「大人」の違いについて記述している。続けて、「世界の存在や、自分の存在。世の中そのものの成り立ちやしくみ。過去や未来の存在。宇宙の果てや時間の始まり。善悪の真の意味。生きていることと死ぬこと…（中略）…こうしたすべてのことが、子どもにとっては問題である」（永井, 1996）と述べている。

Piajet が指摘するように、子どもは成長するにつれ、かつての自他未分化で自己中心的な世界を脱していく。そうした自我の確立に伴い、改めて自分と自分を取り巻く世界を見たときに、子どもは前述のような問いを抱えずにはいられないのではないだろうか。もちろんその問いが、どれくらい明確に言語化されるかには個人差があるだろう。しかし、どのような子どもであっても、自分という存在や世界の存在という、何も分からず答えもない根源的問題に等しく放り出されることに違いはない。「わかっていないということを忘れてしまっている」大人たちは当然ながら答えをくれない。そのような中で、子どもたちはどうやってその問題と対峙しようとするのだろうか。

本研究では、子どもたちが投げ出されるこうした「世界の謎」について、まず自我体験（Bühler, 1921）についての知見を参考としながら検討する。続いて、子どもと「世界の謎」との出会いについて示唆を与えてくれると考えられる、『ペンギン・ハイウェイ』（森見登美彦, 2010）および『わたしを離さないで』（カズオ・イシグロ, 2005）の２つの物語を参照し、さらに考察を深めたい。

Ⅱ．自我体験と世界への問い

1．自我体験とは

第一次世界大戦後のドイツにおいて、Spranger（1882-1963）らを中心に青年心理学が盛んとなった頃、その潮流を担う一人である Bühler（1893-1974）は、青年の日記を分析することで彼らの心理に迫ろうとした。Bühler（1921）は著書『青年の精神生活（*Das*

seelenleben des jugendlichen)』の中で、ルドルフ・フォン・デリウスという青年の次のような日記の一節を紹介している。

> *夏の盛りであった。私はおよそ12歳になっていた。…（中略）…私は起き上がり、ふり向いて膝をついたまま外の樹々の葉をじっと見た。この瞬間に私は自我体験をした。すべてが私から離れ、私は突然孤独になったように感じた。妙な浮かんでいるような感じであった。そして同時に自分自身に対する不思議な問い、お前はルディ・デリウスか、お前はお前の友達がそう呼んでいるのと同じ人間か、学校での一定の名前をもち一定の評価を受けるその同じ人間なのか、お前は同一人物か。私の中の第二の私が、ここでまったく客観的に名称としてはたらくこの別の私に向かい合った。それは、今まで無意識的にそれと一体をなして生きてきた私の周囲の世界からのほとんど肉体的な分離のごときものであった。私は突然自分を個体として、取り出されたものとして感じた。私はそのとき、何か永遠に意味深いことが私の内部に起こったのをぼんやり予感した。*

Bühler（1921）はこの青年の体験を、日記の中の言葉から「自我体験（*Ich-Erlebnis*）」と名付け、「思春期に起こる自我の構造的変化の突然の意識化」、「自我が突如その孤立性と局限性において経験されること」と定義した。青年心理学研究の勢いが減じるとともに自我体験が言及されることも減っていったが、日本においては西村（1978）によって紹介されたことを皮切りに、1980 年代の高石の調査研究（宮脇（高石）、1984,；高石, 1988；高石, 1989）を嚆矢として、渡辺（1992, 1995, 2002, 2009）、天谷（1998a, 1998b, 1999, 2001, 2002, 2004, 2005, 2011a, 2011b）らによる研究が重ねられていく。それらの研究からは、大学生を対象とした回想的調査ではおおよそ 2 ～ 3 割から体験想起が報告されること、体験が生起するのは思春期・青年期に限らず児童期からも見られること等の知見が明らかになってきている。海外においては、オランダの発達心理学者である Kohnstamm（2004）の研究が挙げられる。Kohnstamm（2004）は Jung の自我体験を誘発刺激として、新聞、雑誌、ラジオを使って同様の体験事例の応募を呼びかけるというユニークな調査方法を用いており、オランダ・ドイツ・スイス・オーストリア・ベルギーの自我体験の事例が収集されている。

2. 自我体験と「世界」

自我体験は「〈私〉という謎」（渡辺・高石, 2004）に出会う体験とされることが多いが、それは同時に、世界の謎に開かれることでもあるだろう。

西村（2004）が自我体験について、「自分が世界の中にどのように位置づけられたのかの認識である」と述べるように、私という存在について考える時には、その私を内包する世界について、必然的に問わざるを得ない。自我体験の報告において、私という存在の不思議さに気付いた際、「私はなぜこの時代のこの場所に生まれ存在しているんだろう？」という表現がよくみられるが、果てのない空間と時間の中で私の存在を自覚するということは、「世界の謎」を問うことと切り離せないと考えられる。

また、自我体験と世界の謎について検討する時、渡辺（1992, 1995, 2002, 2009）が提起した「独我論的懐疑」も重要である。独我論的懐疑とは、「他人も自分と同じようにものを考えたり感じたりするのだろうかとか、私だけが本当に生き

ていて他人はみんな機械のようなものではないかとか、思ったことがある」というように表現される体験であり、渡辺・小松（1999）ではその定義について、「『私』の孤立性・唯一性・例外性が強く意識され、さらにこうした『私』の性質と整合するように『私』を中心とした独特な世界観が形成されていること」としている。渡辺は、独我論的懐疑を、哲学上の問いや、特殊な病理的症状ではなく、ごく普通の子どもに発達の過程で生じる体験として捉え、自我体験の一形態であるとして位置づけている 。

独我論的懐疑を自我体験として捉えるかどうかは研究者により異なるが、先に引用した永井（1996）も独我論的懐疑と呼べるような体験に触れており、次のように述べている。

> *「なぜぼくは存在するのか」という問題は、独我論の問題でもある。この問題は、ぼくの中で様々な形をとった。ひとつのかたちはこうだ。歴史や科学がそうであるのなら、ぼくの人生全体もそうなのではあるまいか。ぼく以外の人とは、ぼくの世界の登場人物にすぎないのではあるまいか。世界中のあらゆる出来事が、ぼくというただひとりの観客のために上演されている芝居にすぎないのではあるまいか。ビートルズの流行もベトナム戦争も、ぼくひとりの観客のために書かれたシナリオに過ぎないのではないか。*

永井自身は、「しかし、この考えは、ぼくを満足させなかった。ぼくひとりのために、世界がこれほど大がかりな芝居を上演しなければならない理由がわからなかったからである」としている。こうした永井（1996）の報告からは、私という存在の謎から世界の謎へと開かれ、懸命にその謎と対峙しようとする一人の子どもの姿が、ありありと浮かび上がる。

永井（1996）とはまた異なる形で世界の謎を体験している貴重な報告として、末積（2020）の研究が挙げられる。末積（2020）はおよそ5～10歳の頃に自身が体験していた世界を克明に報告している。それは、自分だけが人間であり、周りの人間は本当は爬虫類のような別の生物だという世界である。それらの生物は普段は人間の姿をしているが、目を閉じている時だけ、実際の姿を現す。

> *リビングで母とこたつで暖をとりながらテレビを一緒に見ているときに目をつむると、母は爬虫類のような生物に変わっている。周りは薄暗く、目を開けていたときと世界観は一変しているが母はその容姿でこたつに入ってテレビを見ているのだ。*
>
> *父が現実世界で私の隣でパソコンを開き、仕事をしている。その時に目をつむると、そこには別の生物の姿をした父が、パソコンで文字を打っている光景が見える。しばらくして目を開けると、現実世界（人間の姿）の父もパソコンで文字を打っている。*

こうした世界観が成立した背景として、体験当事者である著者本人がいくつかの観点から考察しているが、そのうちの一つとして、「爬虫類同士が話している言葉が分からないから、自分とは違う生物だと解釈していた。つまり、大人の言葉が幼児である私は分からなかったから（このような記憶があるから）、そのことが転じて大人同士の会話は私にとっては理解不可能な爬虫類の言葉であろうと思っていた」と述べている。つまり、自らの理解が及ばない世界を何とかして理解する術として、「実は自分以外は爬虫類である」という世界観が構築されていた

ことが分かる。

永井（1996）や末積（2002）、そして渡辺による独我論的な体験の報告からは、世界の謎に直面した子どもたちが、思考力や想像力を駆使し、自分なりに何とかその謎に立ち向かおうとする様子が窺える。また、「自分以外の人間は芝居の役割を演じているのではないか」、「自分だけが人間で、周りの人間は本当は爬虫類のような別の生物ではないか」というように、「他者」もまた世界の謎の一部として現れている点も重要であろう。「私」や「自分」の唯一性の自覚が強まることは、翻って他者とは何かを問う事にもつながることが示唆される。

Ⅲ．子どもたちの物語に見る世界の謎

1.『ペンギン・ハイウェイ』における世界の謎

ここからは物語の検討を通して、子どもたちと世界の謎について考察したい。まず取り上げるのは、森見登美彦（1979-）による小説『ペンギン・ハイウェイ』（2010）である。

物語の主人公であるアオヤマ君は、小学校 4 年生の好奇心豊かな少年である。学校の勉強だけではなく、自分なりの研究目標を立てて考察し、毎日の発見をノートに記録する。「一日一日、僕は世界について学んで、昨日の自分よりもえらくなる」と、日々努力を怠らない。

アオヤマ君が両親と妹と 4 人で暮らすのは郊外の新興住宅街で、住宅地の周りには川が流れ森が茂る。アオヤマ君は友達のウチダ君と 2 人だけの探検隊を組織し、街の秘密地図を作っている。「もう大人には負けないほどいろいろなことを知っている」というアオヤマ君だが、街の全景でさえ彼にとっては未だ謎なのだ。同時に、生や死、「世界の果て」といった根源的な謎にも彼は直面している。昼寝から目覚めた妹が、母親の姿が見当たらない不安から「お母さんが死んじゃう」と泣き出してしまったのをきっかけに、アオヤマ君は次のように回想する。

> *ぼくがもっと何も知らなくて、わがままで、あまえんぼうであった時代、ぼくも妹と同じように大事な人たちがじつはみんないつの日か死んでしまって会えなくなるものだという事実に気づいて、本当にびっくりしたことがあった。ぼくはもちろん生き物がいつか死ぬということは知っていたけれども、そのことが本当の本当に自分に関係があるものだという気がしなかったのだ。どんなに運がよくても、どんなにいやだと思っても、ぜったいにそれから逃げられないのだという事実に気づいたとき、真っ黒の大きな壁がぐいぐい迫ってくるような気がした。（中略）「生き物はいつか死ぬ」ということをいくら説明しても、彼女が納得しないということが、ぼくにはわかっていた。なぜならぼくも、あの夜にそんな説明では納得しなかったと思うからだ。*

平和な街に、ある日、どこからともなくペンギンが突如出現するという事件が起きて、大騒ぎとなる。アオヤマ君は当然、「ペンギンたちは今ごろどうしているだろうか。なぜ彼らは急にこの街にやってきたのだろう。ひとつ、この事件を研究してみなくてはならない」と、この謎の調査に乗り出す。その過程で、歯科医院のお姉さんに、ペンギンを出現させる不思議な力があることを知る。アオヤマ君とお姉さんは以前から親しく、毎週土曜日に街のカフェで会い、お姉さんからチェスを教わったり、彼がノートに書いた発見を静かに聞いてもらったりする存在だった。ある時、お姉さんが放り投げたコーラの缶がペンギンに変態するのを目撃し、呆然

とするアオヤマ君に、お姉さんは語りかける。

「私というのも謎でしょう」
お姉さんは言った。「この謎を解いてごらん。どうだ。君にはできるか」

なぜペンギンを作り出せるのかについては、お姉さん自身にも分からない。ウチダ君や聡明なクラスメイトのハマモトさんも巻き込み、子どもたちはペンギンの謎、ひいてはお姉さんの謎を追っていく。森の奥に出現した謎の球体〈海〉の秘密に気づいた時、アオヤマ君は謎の核心に気づく。〈海〉は世界が壊れた裂け目、穴であり、ペンギンたちはその穴を塞いで世界を修復するための存在であるということ、そして、お姉さんは人間ではないということである。

〈海〉は拡大を続け、ついに街を飲み込んでしまうほど大きくなり、〈海〉の調査団であったハマモトさんの父親も飲み込まれて行方不明となる。アオヤマ君とお姉さんは〈海〉に飛び込んで救出に向かい、ペンギンたちと〈海〉を崩壊させるが、それは同時にお姉さんの存在が消えることでもあった。

「アオヤマ君、私はなぜ生まれてきたのだろう？」
「わかりません」
「君はなぜ自分が生まれてきたのか知ってる？」
「ぼくはウチダ君と、ときどきそういう話をします。でもそれはぼくらにはむずかしい。そういうことを考えていると頭がツーンとするってウチダ君は言います」
「そうか、じゃあ、しょうがないね」
「でも自分がなぜ生まれてきたか、いつかわかるかもしれない」
「わかったら教えてくれる？」
「教えます」
（中略）
「私の謎も解けるだろうな。そうしたら私を見つけて、会いにおいでよ」
「ぼくは会いに行きます」

〈海〉もペンギンもお姉さんも消えた世界で、アオヤマ君はますます熱心に街を探検し、勉強に励む。いつか世界の謎を解き、どれだけお姉さんを大好きだったか、もう一度会いたかったかを伝えるために。

アオヤマ君は、「なぜ生まれたのか」、「この世界は何なのか」、そうした世界の謎について、「お姉さん」という他者の存在を通して出会ったと言える。お姉さんは消えてしまったが、謎は依然、謎のままであり、その謎こそが、彼を生へと駆り立て、未来へと向かわせていることが分かる。

2.『わたしを離さないで』における世界の謎

次に、カズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro, 1954-）による小説、『わたしを離さないで（*Never Let Me Go*）』（2005/2006）について検討したい。

物語の語り手であるキャシーは、「介護人」として臓器移植の「提供者」たちのケアをしている。キャシー自身もいずれ「提供者」となる予定であり、物語は、キャシーが子ども時代を過ごした施設、「ヘールシャム」での出来事を回想するところから始まる。

ヘールシャムは寄宿学校のような施設で、16歳までの子どもたちが、「先生」と呼ばれる保護官から授業を受けながら生活している。勝ち気でリーダー格のルース、癇癪持ちだが思慮深いトミー、その他たくさんの仲間たちと共に、時にいさかいも体験しつつ、キャシーは成長していく。「保護官のこと、生徒一人一人がベッドの下に置いていた宝箱のこと、サッカーやラ

ウンダーズの試合、本館をぐるりと周る散歩道、その小道から忍んでいける建物の窪みや陰、アヒルの泳ぐ池、食事のこと、霧の朝に美術館から観た野原の景色…」等、ヘールシャムでのささやかな、けれど幸せな記憶は、尽きることなくキャシーからあふれ出てくる。

しかし一方で、ヘールシャムには多くの謎があり、どこか不穏な影がさしている。「当時のわたしたちには、ヘールシャムの外が御伽噺の世界も同然だった」とキャシーが回顧するように、子どもたちは決して施設の外には出られない。かつて施設を抜け出そうとした子どもたちは死んでしまい、森の中を亡霊としてさまよっているという怪談がまことしやかに共有されている。毎週のように健康診断があり、体を「クリーンに」保つことが強制される。また、子どもたちには絵画や工作といった創作活動が義務付けられており、時折施設を訪問する謎の女性、「マダム」が優秀な作品を持ち出し、「展示会」に出品しているとされているが、詳細は不明である。

キャシーとトミーはこうした謎について共有し、自分たちが生きる世界―ヘールシャムと、その外の世界について考えようとするが、なかなか真実は見えてこない。11 歳になった頃、キャシーはマダムから向けられた嫌悪に似た視線から、自分たちが彼らとは異質な存在であり、忌むべき何かであることを痛切に感じとる。

> *今振り返ると、そういう時期に差しかかっていたのだと思います。自分が誰で、保護官や外部の人間とどう違うのかを少しは知り始めていた時期。でも、単なる事実として知ることと、それの持つ深い意味を理解することとは別物です。（中略）自分が外の人間とはとてつもなく違うのだと、本当にわかる瞬間を。（中略）それは体中から血の気が引く瞬間です。生まれてから毎日見慣れてきた鏡に、ある日突然、得体の知れない何か別の物が映し出されるのですから。*

そしてある日、子どもたちが「映画スターになりたい」等、自分たちの将来について冗談まじりに無邪気に話していたのを聞いたある保護官は、感情的になってついに次のように子どもたちに告げる。

> *あなた方の人生はもう決まっています。これから大人になっていきますが、あなた方に老年はありません。いえ、中年もあるかどうか…。いずれ臓器提供が始まります。あなた方はそのために作られた存在で、提供が使命です。（中略）自分が何者で、先に何が待っているかを知っておいてください。*

キャシーらヘールシャムの子どもたちはクローン人間であり、臓器提供のために存在し、提供が始まれば長くは生きられない。これこそがヘールシャムの子どもたちが生きる世界の謎の実態であった。16 歳となった子どもたちはヘールシャムを出て、提供が始まるまでのほんの数年を施設の外で過ごす。そして、キャシーがルースやトミー達と再開した時には、介護人と提供者という関係となっていた。ルースは、提供を経て亡くなる間際、キャシーとトミーが愛し合っていることを知りながら自分がトミーを奪ってしまったこと、2 人で幸せになってほしいことを伝え、「猶予」の噂を伝える。本当に愛し合う 2 人がマダムに面会して認められれば、提供が猶予されるというのだ。キャシーとトミーはマダムに会いに行くが、猶予など噂にすぎないという残酷な真実を知る。そして、マ

ダムが彼らに創作させていたのは、提供者たちにも「心がある」ことを証明し、臓器提供計画に反対するためだったこと、しかし、今はその運動も頓挫したことが語られるのだった。

マダムの家からの帰り道、トミーは一人車を降り、暗闇の中で怒りと絶望から叫び暴れる。キャシーはただ彼を追いかけ抱きしめることしかできない。しばし抱き合った後、落ち着いた2人は、再び、提供という運命が待つ彼らの生活へと戻っていくのだった。

この物語は、クローン人間や臓器提供といったセンセーショナルなテーマに目を奪われがちであるが、著者であるイシグロ自身は、キャシーらが過ごしたヘールシャムでの子ども時代について次のように述べている（イシグロ, 2013）。

> *私はこの世界を子ども時代のメタファーにしかったのです。つまり、その世界のなかにいる人は、外界が十分理解できないというふうに。（中略）私がこの作品でいおうとしたことは、子ども時代というのはすべてこういうものだということです。もちろんこれはかなり特殊な状況です。でも、あるレベルでいうと、それはわれわれの子ども時代と同じで、外界で起きていることの多くが理解できないのです。*

イシグロ（2013）は、「子どもが大人になっていくときに、どのように感じていくのかを読者に再度味わってほしかった」とも述べている。提供者であるキャシーらの子ども時代を異質なものとして描いたわけではなく、むしろ多くの大人たちが、かつて子どもとして体験したものの再現として描写しているというのである。ヘールシャムの光の面―子どもたち同士の交流や友情、先生たちとの授業風景、そうした日々のささやかな日常場面に、大人たちがノスタルジーを覚えるのは容易いだろう。しかし、世界の仕組み、自分たちの存在の意味、それらの答えが決して得られない不安の中で生きていかなければならないという点においても、ヘールシャムは誰しもの子ども時代のメタファーであると言えるのである。

3. 世界の謎と大人になること

ここまで本章では、『ペンギン・ハイウェイ』と『わたしを離さないで』における子ども時代の世界の謎について参照してきた。

多くの子どもたちの日常に突如謎のペンギンや「世界の穴」が出現することは無いし、外界と遮断された寄宿学校で、臓器提供者としての運命を担って育つ子どもというのも考えにくい。両作品に描かれた子どもたちの体験はあくまでファンタジーではあるが、イシグロ（2013）がいうように、「外界で起きていることの多くが理解できない」という点において、普遍的な子ども時代を描いていると言える。周りのことが分からない、理解できないからこそ、子どもたちは考え続け、時に、独我論的世界観で世界を把握しようとしたり、末積（2020）のように爬虫類の世界を一人生きようとしたりする。それらはいずれも、子どもたちなりの世界の謎との戦い方だと言えるだろう。

また、いずれの作品においても、物語の場が非常に閉鎖的で限られていることも象徴的である。『ペンギン・ハイウェイ』においては、アオヤマ君が暮らす郊外の住宅街が主な舞台であり、たまに父親とドライブで街の外に出る場面があっても、詳細には描かれない。ウチダ君やお姉さんと電車に乗って街の外に出ようとした時はいつも、何らかの事情で引き返すことになる。『わたしを離さないで』においては、より明確に、ヘールシャムという閉ざされた環境のみが舞台になる。子どもたちにとって外の世界

は、「御伽噺」のようにリアリティが無い。しかし、このように限られた環境や情報の中に生きていても、むしろ限られているからこそ、子どもたちの世界への関心が高まっていくことは、それぞれの作品で描かれている通りであろう。どこにでもあるような新興の住宅街であっても、アオヤマ君にとっては探検すべき未知の世界であるし、実際、謎のペンギンや〈海〉が出現してしまう。キャシーにとってのヘールシャムも、閉鎖的であるからこそ、自分たちがここに生きる意味や外の世界の意味を考えさせることになった。子どもという立場にあって、実際に体験できる世界の範囲は非常に限定されているが、そうした物理的な限界に関わりなく、子どもたち自身は果てしない根源的な謎に開かれていると言える。

それでは、こうした子ども時代を脱し、大人になるということはどういうことなのだろうか。『ペンギン・ハイウェイ』ではアオヤマ君の子ども時代のみが描かれ、大人になった彼の物語は知ることができない。方、『わたしを離さないで』では、キャシーたちが成長し、ヘールシャムを離れ、大人となった姿が描かれる。キャシーにとっての世界の謎がどのように変化していったか見ていくことで、大人になることと世界の謎の関係を考えてみたい。

『わたしを離さないで』において、子どもたちの成長に伴い、世界の謎、少なくともヘールシャムという限られた世界の謎は明かされていく。しかし、キャシーらがヘールシャムを出て踏み出した外の世界も、臓器提供計画という大きなシステムによって彼女らを縛る世界であった。そのシステムは、キャシーらが「なぜ生まれてきたのか」という問いに、暴力的とも言える一方的な回答を与える。すなわち、臓器提供のためのクローンである、それ以外の存在理由は無いと。システムはあまりに強固であり、否応なくキャシーたちを飲み込んで一つの運命へと押し流す。かつては世界の謎に目を見開き、この世界は何なのか、世界の外は何なのか、人間とは何なのかと、疑問を持ち続けた子どもとしてのキャシーの姿は次第に失われていく。システムを超えた世界の意味、自分の存在や生と死の謎、そうした本質的な問いが投げかけられることはない。キャシーは、永井（1996）がいうような、「世の中になれてしまって、わかっていないということを忘れてしまっている」大人になってしまったとも言えるのかもしれない。しかし、彼女の境遇を鑑みれば、それを責めるのはあまりに酷であろう。

イシグロ（2013）は、ヘールシャムが子ども時代のメタファーであるというだけではなく、この物語自体も人間の状況のメタファーであるとして、次のように述べている。

> *われわれは大きな視点をもって、つねに反乱し、現状から脱出する勇気をもった状態で生きていません。私の世界観は、人はたとえ苦痛であったり、悲惨であったり、あるいは自由でなくても、小さな狭い運命のなかに生まれてきて、それを受け入れるというものです。みんな奮闘し、頑張り、夢や希望をこの小さくて狭いところに、絞り込もうとするのです。そういうことが、システムを破壊して反乱するよりも、私の興味をずっとそそってきました。（中略）究極的な言い方をすれば、私はわれわれが住む人間の状況の、一種のメタファーを書こうとしたのです。*

キャシーの物語を、臓器提供計画という突飛な筋書きの中で死んでいく、可哀そうなキャラクターの物語として消費することはできない。理不尽で不条理な世界で自分の運命を生きざる

を得ない大人たち、他ならぬ私たち自身の物語として、イシグロは描いていると言えるのである。

『ペンギン・ハイウェイ』では、お姉さんが消えてしまった後、そのことをめぐってアオヤマ君と父親が会話する場面がある。

「なぜお姉さんは行ってしまわないといけなかったのだろう」
「それをおまえは理不尽なことだと思うかい？」
「理不尽なことだと思う」（中略）
「そこにも世界の果てがあるね」と父は言った。
「どこ？」
「お前が理不尽だと思うことさ。おまえにはどうにもできないのだから」
「ぼくは世界の果てに興味があるよ。でも大変やっかいだね」
「それでも、みんな世界の果てを見なくてはならない」
「なぜ見るの？」
「なぜだろうね」（中略）
「世界の果てを見るのはかなしいことでもあるね」
「もちろんそうだよ。だから人は泣く」

ここで話題となる「世界の果て」は、キャシーが抗えなかった運命にもつながるものかもしれない。疑問を持つことすら許されない、理不尽でどうにもできない運命。世界の謎を忘れ、のうのうと生きることだけが大人になるということではなく、世界の果てでただ涙を流すしかないこと、それもまた大人になることと言えるのではないだろうか。

Ⅳ．おわりに

本研究では、自我体験研究からの知見と２つの物語作品を通して、子どもと世界の謎について検討してきた。

この世界は何なのか、私はなぜ存在するのか、生とは、死とは何なのか。こうした根本的な問いを抱えたまま、私たちは生きていかなければならない。それ自体が大変に理不尽な事態であるとも言える。以前、筆者が自我体験についてインタビューしたある調査協力者は、自我体験の衝撃や当時抱いた感覚が薄れていくことについて、「カラシの辛さに慣れていくよう」と説明した（千秋, 2010）。この理不尽さを抱いて日常を生きていけるのは、そうした慣れがあるからこそとも言えるだろう。子どもたちもまた、この理不尽で答えのない世界に投げ出され、生きている。どんなに幼い子どもであっても、自らの持てる力や空想力を使って、世界の謎と対峙しようとしていることは忘れてはいけないだろう。同じ謎を抱いて今日も生きる同志として、大人たちが子どもの姿を見直すことも必要ではないだろうか。

また、本稿においては十分に扱うことができなかったが、世界の謎には「他者」という謎もまた含まれると考えられる。アオヤマ君がお姉さんの存在に世界の謎を見出したように、私たちの隣に立つ他者もまた、大きな謎に通じる。そして同時に、キャシーとトミーのように、この理不尽な世界を共に生きる仲間にもなり得る。他者という謎との出会い方について検討することも、今後の課題としたい。

文献

天谷裕子（1998a）.「自分というものへの気づき」現象とその関連要因――中高生への質問紙調査から. 日本発達心理学会第62回大会発表論文集, 265.

天谷裕子（1998b）.「自分というものへの気づき」現象に関する探索的研究――大学生による自我体験の報告から. 名古屋大学教育学部紀要（心理学科）, 45, 75-82.

天谷裕子（1999）. 面接法による自我体験の調査方法について. 名古屋大学教育学部紀要（心理学科）, 46, 265-274.

天谷祐子（2001）. 自我体験に関する縦断研究――小学校高学年生・中学 1 年生を対象として. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, 48, 97-106.

天谷祐子（2002）.「私」への「なぜ？」という問いについて――面接法による自我体験の報告から . 発達心理学研究, 13（3）, 221-231.

天谷祐子（2004）. 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い―自我体験―の検討. 発達心理学研究, 15（3）, 356-365.

天谷祐子（2005）. 自己意識と自我体験――「私」への「なぜ」という問い――の関連. パーソナリティ研究, 13（2）, 197-207.

天谷祐子（2011a）. 私はなぜ私なのか――自我体験の心理学. ナカニシヤ出版.

天谷祐子（2011b）. 自我体験の経験時における深刻さと体験後の意味づけに寄与する要因の検討――初発時期と体験期間を切り口にして. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究, 14, 25-35.

Bühler, C.（1921）. *Das Seelenleben des Jugendlichen: Versuch einer Analyse und Theorie der psychischen Pubertät*. Jena: G. Fischer. 原田茂（訳）（1969）. 青年の精神生活 . 協同出版.

Ishiguro, K.（2005）. *Never Let Me Go*. 土屋政雄（訳）.（2006）. わたしを離さないで. 早川書房.

カズオ・イシグロ（2013）. 愛はクローン人間の悲しみを救えるか. 大野和基（インタビュー・編）. 知の最先端. PHP 新書.

Kohnstamm, D.（2004）. *Und plötzlich wurde mir klar: Ich bin ich!: Die Entdeckung des Selbst im Kindersalter*. Bern: Verlag Hans Huber. 渡辺恒夫・高石恭子（訳）（2016）. 子どもの自我体験――ヨーロッパ人における自伝的記憶. 金子書房, pp. 246-263.

宮脇（高石）恭子,（1984）. 思春期女子における自我体験の様相. 日本教育心理学会総会発表論文集 26. 418-419.

森見登美彦（2010）. ペンギン・ハイウェイ.　角川書店.

永井均（1996）.〈子ども〉のための哲学.　講談社現代新書.

西村洲衛男（1978）. 思春期の病理――自我体験の考察 . 中井久夫・山中康裕（編）. 思春期の精神病理と治療 . 岩崎学術出版社, pp. 255-285.

西村洲衛男（2004）. 自我体験とは　渡辺恒夫・高石恭子（編）.〈私〉という謎――自我体験の心理学 . 新曜社, pp. 17-42.

千秋佳世（2010）. PAC 分析を応用した自我体験の語りに関する一考察. 心理臨床学研究, 28（4）, 434-444.

末積聖歩（2020）. 幼児期におけるファンタジー世界についての研究 . 京都文教大学臨床心理学部 2019 年度卒業論文（未公刊）.

高石恭子（1988）. 青年期の自我発達と自我体験について. 京都大学教育学部紀要 , 34, 210-220.

高石恭子（1989）. 初期及び中期青年期の女子における自我体験の様相 . 京都大学学生懇話室紀要 , 19, 29-41.

渡辺恒夫（1992）. 自我の発見とは何か――自我体験の調査と考察. 東邦大学教養紀要, 24, 25-50.

渡辺恒夫（1995）. 再論 自我の発見とは何か――その意義と方法論的問題 . 東邦大学教養紀要, 27, 63-85.

渡辺恒夫（2002）. 自我体験の類型、判定基準、およびアイデンティティとの関係 . 東邦大学教養紀要, 34, 9-25.

渡辺恒夫（2009）. 自我体験と独我論的体験――自明性の彼方へ. 北大路書房.

渡辺恒夫（2012）. 自我体験研究への現象学的アプローチ. 質的心理学研究, 11, 116-135.

渡辺恒夫・小松栄一（1999）. 自我体験：自己意識発達研究の新たなる地平. 発達心理学研究, 10（1）, 11-22.

渡辺恒夫･高石恭子（編）.（2004）.〈私〉という謎――自我体験の心理学. 新曜社.

Abstract

When Children Encounter the Mysteries of the World: The Mystery of the World in "*Penguin Highway*" and "*Never Let Me Go*"

Kayo SENSHU

As children grow up, they shed their former world of self-centeredness and differentiate between oneself and others. Thus, with the establishment of their ego, when they look at themselves and the world around them anew. They are likely to encounter fundamental questions such as, "What is I?" and "What is the World?" The question, "what am I?" has been examined in the study of ego-experience, but questioning the existence of the self inevitably leads to questioning the world that contains me.

In this study, we first examined these "mysteries of the world" to which children are thrown with reference to the findings on ego-experience. In particular, the study of solipsistic experiences revealed that children who are confronted with the mysteries of the world, somehow try to confront them in their own way, making full use of their powers of thought and imagination.

The study then referred to two stories, "*Penguin Highway*" (Tomihiko Morimi, 2010) and "*Never Let Me Go*" (Kazuo Ishiguro, 2005), which highlight the encounter between children and the mysteries of the world, and further discussed them. In "*Penguin Highway*," the existence of others was one of the mysteries of the world. In "*Never Let Me Go*," the relationship between the mysteries of the world and growing up was examined.

There are no answers to fundamental questions like what is the world and why do I exist, and we must live in an unanswerable and irrational state. The same is true for children, irrespective of how young they are. It is necessary for adults to reassess their children as comrades who live today with the same mysteries in mind.

Key words : childhood, mysteries of the world, ego-experience